1

ほっとアイスティー

大空を1羽の鳶が輪を描く
花燃ゆる細かく綺麗な赤椿
風強く桜を浴びて落ち着いた
楽しそう活けた花々山笑ふ
一生を重ね合わせる夜桜に
道のりをぶらぶら歩く春の街
夏期課題三昧境に惹き入れる
夏の波自分の時間錘つく
炎天下歪められてる世界線
浮き輪もち海へのバスに揺られてた
絶頂は風向き次第アイスティー
空浮かぶ夜の暗がり花火かな
梅雨明けで片足2度づつ縁側で
苦しまず自分と向き合うカタツムリ
自由の身思いのままだ夏の蝶
悠々と輪を画いてた渡り鳥
泣くような顔で手を振る秋の暮
真萩散る夕陽の光薄れゆく
彼岸花滅亡の美を言い聞かせ
16歳大変な時期唐辛子
無垢な知性理性を産んだ鳳仙花
初明かり堂々とした店構え
休日に部屋でくつろぐ冬の昼
雪遊び友達とする風邪引いた
独特の住み分け原理オリオン座

2

青春の25ページ

射場内花粉で黄色い弓と矢
弓引きを射抜き襲いし花粉症
新品の自身の一部風光る
花見より死に物狂いシャトル追う
桜の芽のようちぃさき目標
炎天下弾の中は整う場
的思い夏の宵響く弦の音
ゴールドへ共に並走向日葵と
額滴るレモンスイ拭うキミ
熱帯びる透明レースに汗拭う
夏浅し次に向かう糧になる
炎天下限界の先飛べた自分
薄暗い的を見る先登る月
弓引き中近所匂う焼き鳥だ
ユーフォソロ影が光る文化祭
満点の音を作りし上り月
霜焼けと戦う指や足袋の中
寒稽古揺らぐ足裏で足踏み
的中音私にとって除夜の鐘
弓始こんなもんかと肩慣らし
薄雪の絨毯厚く紡ぐ音
焼き芋を片目に走るランニング
逆風も追い風になる冬の暮れ
初茜その1秒を削りだせ
息しろし競い合いつつ強くなる

3

歳時記

初日さすビルの重なる奥の奥
新春の鐘の響きや大道芸
初風呂の香りを母と選びけり
あぜ道に童ら担ぐ獅子頭
うとうとと課題をこなす四日かな
初桜一ページ目は丁寧に
春愁やクラスメイトの顔のなし
泣きながら勉学励む花粉症
膨大な課題忘れて春眠し
藍微塵名前忘るる曾孫かな
夏の海透明ブルーに心澄む
黄昏に海鵜のくの字八十度
夏雲や風に吹かるるロングヘアー
さっきまであの雲の下サングラス
ペンライト推しへと向ける夏の宵
星月夜セカオワ流す帰り道
屋根裏の母の似顔絵敬老日
弟の林檎のうさぎ不格好
念願の黒ネクタイやハロウィーン
銀杏散る夢咲坂を我は行く
水鳥に名前を付ける君のいて
こぼれ出たクリスマスっていいですね
帰り道寒夕焼へペダル漕ぐ
友からのミサンガくくる春隣
待春やキュッとむすんでネクタイピン

4

青蜜柑

春セーター誘いはいつも私から
丸刈りの花盗人は肩の上
春雪や変更なしの時間割
トラックに最後の瓦礫風光る
敬語からあだ名に変わり夏浅し
海風や麦わら帽子君の手に
手を繋ぐ勇気を奪う夏の雨
赤星や君のメールの通知待つ
風鈴の揺れている間に会いにきて
顔文字の真意を探る夜長かな
どんぐりの帽子無くして髪を描く
大富豪する花野行き列車かな
青蜜柑良かれと思いやりました
嘘つきに既読のついた聖夜かな
妹の布団を剥いでだんごむし
日脚伸ぶふるさと響く帰り道
雪だるまの鼻を求めて野菜室
怪獣のごと白息の子らの来る
湯豆腐にはふはふしたる眼鏡かな
行く年や口をきかない母と叔父
年歩むもう開かないピアノあり
陽の下に踊り転げる春着の子
年玉や叔父の手にある蜜柑の香
書き初めの「の」の字の肩身狭きこと
春風や別れた人と出会う人

5

流れ着く

夏の月ハブ酒にハブの絡み合ふ
歯磨きに部屋を彷徨く金魚鉢
扇風機漁港の椅子の硬さかな
蚊柱や命令形の標識に
口もつてゼリーの蓋を開けにけり
かはほりや肉叉で米を食らひゐる
浮くゐもり沈むゐもりや小雨降る
秋暑しケバブの肉の回りをり
銀紙にチョコレートつく夜学かな
流れ着く壜に異国語秋の蠅
水澄みて天窓に陽の届きをり
開店の花のうるさき厄日かな
真白なり角を伐らるる鹿の尻
絞り切つて雑巾固し冬の星
折り紙の皺の増えゆく枯木かな
着膨れて坊主頭の乗つてゐる
三越の獅子の銅像クリスマス
皆バスに眠つてゐたり冬銀河
じゃんけんで先攻決めるラガーかな
食券の出てくる無音春浅し
片仮名に予約の名簿雁帰る
ちんあなご砂より伸びてくる日永
飛行機の便器の黒し四月馬鹿
花筏立てかけてある松葉杖
焼豚に食ひ込む紐や山笑ふ

6

あの日の空耳

友人の活躍願う別れの日
雪田や生温かいタンブラー
蝶が飛び春の訪れ知らせてる
親の元巣立つときにはさくら咲く
音もなく静かに揺れる桜の木
鳴り響く蝉の鳴き声おわりかな
拙速な目覚ましさえ夢有明の月
甲子園夏より熱い球児たち
短冊に願いを込める七夕に
春の夜散歩をすれば桜散る
競い合う線香花火これからも
雀の子風に音乗る声奏で
横たわり空を見上げて花曇り
中秋に無心で眺める満月を
木漏れ日と星と静けさしみじみと
あかとんぼ待ってとおいかけ遠回り
鈴虫の鳴き声響く秋の夜
音もせずものの静けさ寒凪や
穴惑いカレーが冷える冷蔵庫
見上げれば青く見える冬の空
はーっとね白い息がでたんだよ
窓開けてお外を見たら雪景色
物価高止まることなき南風
校庭にたくさん並ぶ雪だるま
しらす干し空を見上げる後ろ髪

7

ふくろふのいろ

かへるでの黄色どきりと落ちにけり
走れども太き尻尾の狸かな
たま風や肉まんの餡こぼれ落ち
見舞ふたびヤニの濃くなる襖かな
ストーブの暖かき音寒き音
乾杯の右手にほくろ雪催
湯豆腐の箸より湯気の立つてをり
天板の落書き薄き炬燵かな
てつぺんの星の壊れてゐる聖樹
クレヨンの巻紙剝がし冬の雷
冬枯の道にチワワの糞りにけり
龍の玉鍵を探してゐたるなり
ふくろふのいろ梟のゐる森のいろ
風呂吹の上に睫毛の震へけり
短日やCan★Doの星くつきりと
韓国に流行る冬帽子といふ
日記買ふ日記の山の崩れけり
初空や母の真珠のつるつると
寒椿シャッター音を身に浴びて
雪吊や救急箱を探しつつ
カーポート満車や鏡餅開く
採氷のいま太陽を切り出しぬ
スケートの手袋をすぐ拾ひけり
何人も入らぬほどの枯野かな
雪棹をぐらぐら揺らし人を待つ

8

季節に住む

それぞれの想い交差す初春かな
桜色染まる頬でご挨拶
春眠や光も届かぬ薄まぶた
髪を切り春の風押す競技場
靴擦れも足取り軽し春の風
三年でリレー選手の夏来たる
夏シャツよ交代の笛学校で
飲み干した冷えた麦茶で生き返る
楽しむも学ぶも自由夏の果
ペン持たずぱたぱた仰ぐ晩夏かな
〝頑張れ〟に苛立ち覚えた溽暑の日
運動会友と囲んだお弁当
善光寺秋色ドレス身に纏う
思うままローファー鳴らす秋の暮れ
秋夕焼影だけ大きい今の我
零時過ぎ学ぶお供に落花生
ストーブか無音の世界をこわすのは
善光寺補修工事に歳惜しむ
進級を感じさせたる冬支度
空つ風我のため息運んでく
冬の星我の心は不透明
キットカット味わう受験の暇かな
待春の教室に待つ試験監
あと一分氏名を書き足す受験生
春の宵別れ惜しんで暗くなり

9

歩けば

特急の終着静か冬茜
おれづみや子は顔の肉集め泣く
ダイヤルの八の固さや藤の花
新宿と代々木近くて石鹸玉
掛け軸の影広がりぬ春の夕
蝶々舞ふレジャーシートを広げれば
暖かやすずめの影の跳ぬるさま
アスパラガス育つ下校チャイムとほく
炎帝や浮きの触れたり離れたり
夏雲やタイプライター叩く音
目の蒼き夏野の鹿と出逢ひけり
友を待つ人の手にあるラムネかな
桜桃ほどに坊の指むちり
鷺草や初めて簪挿す女
マグカップ夜長に一人残されて
秋茄子土偶の足のまろまろと
兄妹の同じ顔する花野かな
赤蜻蛉遊具の網に止まりけり
靴洗ひつつ笑ふ子や暮の秋
秋惜しむポケットに葉を忍ばせて
道の名は江戸より小春日和かな
竹馬や少しだけ先生になり
血の混じる喉に脈あり寒稽古
青写真兄とレトルトカレー食ふ
雨戸開け朝日に塵や年新た

10

鬼のゐぬ世

桜まじホットケーキの泡はじけ
ひとりでにめくれる頁春ショール
弔ひの果つ蝶の羽化はじまりぬ
春月や日記の文字は角張つて
水馬みづの記憶を尋ねけり
扁額の古傷あらふ五月雨
志望校変へたくなくて天道虫
クーラーの風よそよそし参観日
屋上の白き梯子や雲の峰
炎昼や駅のホームを持てあまし
浮いて来い書いては消せるラブレター
空蝉やみんな失恋経験者
パトカーのそろり追ひ越す金魚売
桃洗ふ鬼のゐぬ世の空あをし
蚯蚓鳴くシャッターに描くスプレー画
お下がりのチャリンコ漕いでゐる良夜
原発のデモの隊列櫟の実
唐辛子上皿天秤振り切れて
鵙日和子ども歌舞伎の初舞台
秋うらら粘土を分くる糸の張
枯木星残り二本の当たり籤
寒禽のぱうぱう鳴ける模試の朝
ホットココア冷めオセロは白ばかり
道場に羽打ちの響く初稽古
深雪晴凶のみくじを固く結ひ

11

めぐる季節

春の風不安の影も引いている
しんみりと落ち着いていた朧月
窓からの桜便り懐かしむ
桜東風まだ寂しさが残る風
五羽の大鳥鮮やかに岩燕
新しい水の風景花吹雪
心ごと海へのバス揺られてる
向日葵が下から見上げる澄んだ空
手の甲で涙を拭いた甲子園
木の花も揺れてと願う油照り
全盛期蝉を待ってる日盛りと
たいていは忘れてしまう夏の宵
目の前にある風景の蝉時雨
定めない心の揺れに秋の雨
秋風が夕日と共に染みてゆく
秋麗景色を土産帰り道
おとなども楽しめてるか秋の声
後ろ影紅葉かつ散るさよならと
菊日和青と緑の真ん中に
冬ざれの心寒さや窓の顔
風の中木々に優しき冬日向
鉢植えの冬椿にも会釈して
今は無き星も瞬く冬銀河
冬の日や金平糖の白い角
オリオン座ロマンチックに空飾る

12

首をくくる

春暁や新校舎には石銘板
夏蜜柑を裂く明日は晴れらしい
逆立ちの手に春の野のやわらかさ
風船に空気のあふれ恋心
義経の声が聞こえる春月夜
スランプも終わってしまいそうな春
蟻を踏む無垢という名の罪もある
途中棄権して炎天の底にいる
風死すや人形のいるゴミ置き場
超新星爆発したような毛黴
首絞めるごとく押しこむラムネ玉
エコバッグ畳まず熱帯夜に一歩
毎日が晴れの絵日記夏の果て
残暑ひきずって旧校舎の廊下
赤信号渡ってはしゃぐ子青蜜柑
外人の耳ひぐらしをノイズとす
秋風鈴祖父の寝言に返事する
黄葉や妹の手にやけど跡
梨剥けば生命線の潤いぬ
のぞいても傷ありの顔氷池
風籠ホットミルクの膜厚し
製紙工場の煙やクリスマス
鐘凍る地蔵の頭に布一つ
冬の星午前零時のらあめん屋
葱の香の口から消えぬ孤食かな

13

町に住む

うららかや床屋の多き町に住む
ブラウニーの気泡潰せば春暖か
閑職と言つてはたらく祖父日永
ティンパニの鳴動春塵吹き飛ばす
春昼やパキリポキリと屈伸す
石ころを避けて続ける蟻の道
風薫る絆創膏の痕白し
ふっと見た手の震へをりソーダ水
一番に自殺のニュース油照
大嫌いになりそうなほど草いきれ
夕凪のスポーツバッグ浜に置き
ひりひりと頭皮の日焼シャンプーす
伝票に大盛り並ぶ夏の果
塾サボって花火大会行ったから
かなかなや溶けあひさうなアスファルト
窓越しの歓声に見る鰯雲
爽やかやあれはロイター板の音
スコップに藷ことごとく真っ二つ
おはようが飛び交う中や曼殊沙華
目の合うて止める鼻唄そぞろ寒
冬の朝結露に触れて目を覚ます
凩や遅延知らせる掲示板
コロッケ三つ肉屋に買うて日短
いつ見ても「空」の表示や北颯
釣りたてを剝ぐ太き腕冬の海

14

顎骨

教会の長椅子低し末枯るる
滑らかに鍵の入りたる十三夜
将棋指しゐて新蕎麦のやつて来る
漬物石すとんと置いて秋深し
寒すゝき巻広告に杭打たれ
早退に下駄箱広し冬ざくら
空際の大樹老いたる雪野かな
炭の番長し少年彫り深し
独房のいつも通りの掃納
初電車まぶしき席を選びけり
冬萌や草の日記はぴかぴかと
あれは凧なのか壊れた鳥なのか
切り絵の目すこし角張る木の芽時
馬宿の丁番赫し霾ぐもり
顎骨がつちふるにとんがつてゐる
お彼岸や押せばリモコン固く鳴る
ヒヤシンス赤子の足を手にのせて
食べものに切れ目や初夏のおままごと
湯上がりの靴下かたし夏蜜柑
アイスコーヒー続々人の来る岩場
羽蟻の夜玩具の電池外しけり
泥の手のまま鉄棒や大西日
電車内で汗をつけ合ふ油照
水銀のせり上がりゆくラ・フランス
飛行船つついてみたし秋日和

15

メゾフォルテ

味失せたチューイングガム冬紅葉
朝十時障子の穴に吾子の指
「もういいかい」まだ遊ばせて帰り花
凍空やカーブミラーにひび一つ
ビル群に飲まれて一人冬の朝
ウィンカーの途切れる音や寒昴
冬ざれや消しゴムのカス床に捨て
街路樹の横拾われぬ紙マスク
懐炉嗅ぐ子犬の爪や欠けており
ざらざらと急須の如く手足荒る
せんべいのパリと乾きて落葉焚
大根の葉ははさはさと吹かれけり
窃盗犯不起訴になりて山眠る
モナリザの口角下がる冬旱
オリオンやほつれた袖の糸で成る
ポスターの失せたる顔や冬の暮
擦っても消えぬボードや冬の月
メゾフォルテ知らぬ私と冬北斗
パソコンを氷に変えた雪景色
爪切りで冬三日月を作りおり
黄金比冬三日月はつゆ知らず
カメレオン目玉を回し春の朝
歯磨き粉戸棚に一つ春の夜
スリッパの裏はがれおり朧月
朝霞バイリンガルに憧れる

16

昨日虫を殺しました

春光や蛙の石像撫でる友
春日傘回して母はコンビニへ
小指にも鉛筆の跡日永かな
山笑うお土産袋の紐が切れ
母校の解体現場残花かな
ゲジゲジに肝まで冷やす水辺かな
巣に帰り母の顔する夏燕
自動ドアに吸い込まれてく金亀子
愛鳥日ポスターに赤い字乗せる
母の手より受けし胡瓜のトゲ刺さる
上の句も捻り出さずに秋を待つ
押し入れの肩たたき券秋深し
秋の蚊の刺せど抜けずに留まれり
秋の夜や焼香の匂い取れぬまま
秋暑し母の背中の爪の傷
目印は菊の花なり祖母の墓
毬栗を踏んだか自転車のパンク
足裏に虫の死体や秋高し
木枯らしに急かされ進む通学路
我が声の一直線なる冬田かな
冬草や行方不明者減らぬまま
寒北斗物置に鬼の面あり
枯蓮の沈みて残る星の影
目盛の消えた定規や氷柱落つ
障子の穴より朝日猫の爪痕

17

道

風光るスニーカー鳴る通学路
地蔵立つシャッター街に下萌ゆる
帰り道永き日ほどの距離があり
廃村や雛人形に刺す瞳
大喧嘩寄り道先のタンポポを
散る花や制服のちがう先輩
軽トラの荷台が玉座春の土
ぶらんこや祖母と揃えた靴の音
芋虫を踏み遊ぶ背のランドセル
夏立つやあぜ駆け抜けるはしゃぎ声
畦道は跣の跡で延びてゆく
海蛍いけないことをするみたい
獣道そこの茂みの姫百合よ
駅前の角ネーブルと古時計
夏果やコンビニクレープかじる夜
ひつじ雲見つめる先は運転席
三日月や野草を跳ねるボカロの歌
足元の小石がゆがむ時雨かな
初冠雪スクランブルの人は見ず
手袋やどこも寄らない帰り道
からっ風不燃ごみって拾わない
セーターや肩触れて待つ青信号
足跡の後を追うのは雪明り
山道や地蔵の笠の穴の雪
河川敷見知らぬ冬の星たちの

18

畦道

足の指のひつそり伸びる朧月
やがて売る祖父の畑や蜆汁
天ぷらの衣の薄き彼岸かな
鳥雲に入りて三つ編み解きけり
春暁の机の螺子はなめてをり
手翳せば水を呑み込む金魚かな
風薫る今てつぺんの観覧車
人類に退化の気配ハンモック
落丁を見つけて夏の水しづか
警官の笑窪の深し夏の蝶
夕立の真只中のユニフォーム
胡瓜切る着信音の鳴つたまま
トロフィーの台座に埃星祭
学校へ脚のそれぞれ草の花
天高し笛に崩るるピラミッド
万華鏡回せばそよぐ稲田かな
星月夜なら畦道をすれ違ふ
連雀や丸を書き込む世界地図
夜食とる正座を軽く崩しけり
姿見に残る指紋や鐘凍る
着膨れてたまごサンドを頬張りぬ
立冬の膝に消毒液の泡
配達の音澄む朝や白鳥来
冬深しジャングルジムに静電気
夜咄の両目は横に伸びてをり

19

今日を大切に

靴擦れは綿菓子の色夏はじまる
葉桜や大きく反りしエビフライ
空蟬のまだ柔らかく膨らめり
朝採れのメロン拭はず切り分ける
冷房車それぞれに目を見開きつ
水中花直線の夜を沈みゆく
朝焼のアトリエに影流れつく
花びらの吹き寄せられて蟻の道
懐かざる翅醒めたるや露の玉
シロップは底へ降りつき花木槿
いとど跳ぶ螺旋階段塗りかはり
おほいなる影蒼々と糸瓜かな
埋もれたるいろ返しつつきのこ飯
赤蕪の餡とつぷりと照り纏ふ
短日や高速船の潮の窓
山眠る雲に遅るる羊の歩
木漏れ日に弄ばれて冬の蝿
群羊の真ん中暗し帰り花
初東風や嘶き遠く荒ぶれる
父と行く若白髪の子漁初め
下町の侘助今日を大切に
眼球の熱き闇夜や落椿
水底は咲いて蛙の国となる
なづな咲く光こぼるる読み聞かせ
春光は睫毛の中へおさめられ

20

かちやかちや

自転車のかごに草餅乗せてをり
遠足の列を赤信号が割る
避雷針はビルの触覚桜餅
ワカメにくるまつて国を出たる船
美しきものみな腐りやすし蝶
永久（とこしへ）に地球てふ箱庭にをり
選挙カー追ひかけてゐる夏楽し
かちやかちやとゼリー追ひかけ回しけり
メガネ屋のメガネに映る揚花火
夏椿命にしがむ悲劇もの
幾億の電球垂れてゐる雨月
双子には双子の孤独天の川
ピーナッツバターを塗りて霧の家
秋晴れや海辺の墓のたたずまひ
走馬灯候補のなくて昼の月
酔ふ人の口笛上手し秋の風
月食や灯りつけやがつた隣家
ローファーに集まつてくる兎たち
石像の膝つややかに初時雨
鍵が開く音凍てにけり父帰る
二十歳にはおでんを好きになれるはず
コーラもファンタも透かせば赤や大晦日
贅沢に半紙使ひて山眠る
薄雲を塗り重ねゆくやうな凧
セロリスープ火星移住の夢をみる

21

栄螺

発言力偉大な力弥生山
カタパルト振り向く姿春雨
ゼンマイを風呂敷包み盗人に
霧の濃い悪夢は巡り終わらない
アルタイル大地へ降下星占い
選ばれた人と文物五月山
線路沿い快速調山繭
パルテノン息が詰まる閑古鳥
五月富士樹海の啓蒙傾聴す
西遊記グローバル化する月見草
怒号飛ぶ親子の絆流れ星
夏の世に江戸川乱歩降臨す
無事願う身体検査ブルーベリー
夏休み最後に用意避雷針
宵闇に被される街清潔に
人間の本性見たり秋の空
芝生敷き舞い上がりけり枯れ落ち葉
月光の血の意志のため獣狩り
スラスター帰路変更秋時雨
たけのこが下水工事の穴の中
成人祭1パーセントで巡り合う
お賽銭ふわっと投げるコロッセオ
念じてた僕の心臓冬眠す
受験期に終戦間際ヘラクレス
どこまでも無垢に留まる青写真

22

雨匂ふ終点

清明の白鳳門や三年目
トロンボーンより出づる春一番
歓声のライトスタンド夏近し
驟雨過ぐ古木のかをる廊下かな
琵琶湖見る父の笑顔やアロハシャツ
「あと一人、」炎ゆ縦縞のユニフォーム
夏の夕部活納めの焼き肉屋
影伸ぶる釣月軒や残り蝉
水澄むや波紋四つで沈む石
焼きたてのパン頬張つて秋半ば
イヤホンの奥の陰ぐち秋黴雨
虫時雨夜の果てまでを覆ひけり
弦音澄む夜や残心の五秒間
賞状を掴む手細し冬麗
底冷えの廊や足音の研す
共テまで残り二十日や日記果つ
伊勢参り前髪直しバスを待つ
手作りの御守りを手に受験生
雪暗や#共テと打つ右手
冬三日月や終点のアナウンス
雪晴の庭や弟の声変わり
梅ふふむ母に教はる親子丼
風光る木製家具の並ぶ店
山笑ふ弾む心を大学へ
高校卒業す雨匂ふ上野

23

青朱白玄

花盛り心に置いて消えていく
グラウンド声援と共に風光る
拝啓未来のわたし春の使い
木の芽時ふりかえって女の子
夏座敷光る粒は甘い味
信号の点滅眩む半ズボン
60円じゃ夢かえぬ夏の夜
目潤う歪んだギターで朝凪よ
シトロンやスキップしてくれリアリスト
カモミール朝日を浴びてまた芽吹く
当たり前流れる毎日天の川
溺れそう誤魔化す夜に二つ星
秋惜しむ満足なんてしていない
秋麗空一面に咲く紅葉
コスモスが夕焼けの帰路に咲いている
車窓から見える紅葉が美しい
音を切り主人公しようオリオン座
帰り花他の目厭わず咲き誇る
舵を切る月が夜を差す冬将軍
朝起きて窓から見える雪景色
雪の日に朝からはしゃぎ大遅刻
七五三あっちとこっちどっちなの
冬の朝明日やろうは馬鹿野郎
大晦日俺はもってる夢がある
愛し人年越詣願う手に

24

なぞりゆく

亀鳴くや極彩色の家を描く
吹き荒れる春一番にあと押され
春眠や深く深くへ落ちていく
朝東風よ運んでほしい我が心
電飾は鈴懸の花に寄生す
入学式我が子の背中に涙して
椅子寄せてチャイム鳴るまで夏蜜柑
この筆で紙裂かんとす半夏生
紫陽花やなぞりゆく瞼の円ら
炎天にウォーターボーイズ跳躍す
潮風やプールの底の苔黒し
軍港にオカリナの子や夜の秋
湯けむりの尾を追いかけて流れ星
月が溶け空も明るくなりました
青一つ空澄むを見る我一人
秋晴れに鳥と雲の名画伯
横浜の秋や新書へ日照雨
国を発つ朝、鵯の尾も白く
陽の光紛るる鳥は赤猿子
初雪やテニスコートへ学ラン投ぐ
小春日や黒板にバースデーの跡
ミサンガを濡らしたままで年を越す
十二分先に年越す吾の時計
月光に蒼いガリガリ君冴ゆる
ドアの奥香り高きは柚釜かな

25

よく響く

春風に口髭を乱されてゐる
教室の重き鍵盤木の芽吹く
春寒し屋上は管うねる場所
骨噛むに右利きの犬雪解風
大屋根に猫の集へる花曇
白鷺とまりて聖蹟桜ヶ丘なる
目を細めれば夏が私を閉じ込める
白玉を口でふやけるまで遊ぶ
人混みに旧友探したる祭
耳に蝉住み始めるに寝転んで
水槽の海老と目の合ふ夏の宵
夏草に埋もれし犬の名を叫ぶ
皿洗ひ終へて一口分の梨
蘭の香を教ふるための墓参り
文字の間の昏き看板秋涼し
ワイパーにかへで紅葉のふたつみつ
番台に林檎貪り食つてをり
雨粒の密に流るる一葉忌
短日の薬呑みこみきらぬ喉
剃刀に石鹸残る小春かな
受箱に親指ほどの飾り松
書初の筆を落とせば勇ましき
寒さにも高値のつきさうな旅館
唐揚げの「唐」よく響く雪催
冬すずめアンテナに水溜まりたる

26

かんばせのやうな

春星と交信できる場所といふ
雨の日の流氷ならば見にゆかむ
薬玉のなかは混み合ふ卒業歌
ふらここと同じ揺らぎに首と息
星朧てふ喧嘩のあとの口ごもり
犬の鼻押し付けてくる春の湖
鶏小屋のささやかな樋茄子の花
鰡跳ねて交番開きつ放しなり
けふ切らるる髪を整へ野菊かな
ナイターの父のビールを捨てにゆく
靴紐を結ぶ日陰を探しけり
夏終る深く潜ってゐるままに
かんばせのやうな花火をつぎつぎと
鶏頭花買ひ足す物を多く選り
朝寒や手のひらほどの花鋏
長き夜の舌持て余す口のなか
覗き込む夜寒の窓の厚さかな
立冬の痰の奇麗な黄色かな
師の行きし後を時雨の音が追ふ
笛ふきの吸ふにも音よ冬薔薇
保険証忘れてポインセチアへ目
鍋の牡蠣縮んでゆくを眺めをり
黒い人ばかりゐるなり除夜の駅
自転車より破魔矢の鈴の響きかな
スケートリンクまだ人をらず鳥をらず

27

設計図

薄氷の回つて星はまだ遠し
紅梅や舌は飴玉裏返す
漢方をゼリーと飲んで沈丁花
石段を上がる黒猫桜東風
春天を触るるサーカス団の歌
ポケットティッシュちちちと開けて鳥曇
踏切の矢印消ゆる初音かな
美容師に結はるる髪や春夕立
夏の日の水糊を傾けてをり
恐竜が飛び出す絵本雲の峰
バナナ剥きつづけいつの間にかひとり
将来をゆらゆら語る冷奴
うみうしのやうな靴下片かげり
横向きに入れる百円うろこ雲
木犀の香りポイント二倍デー
梨の実の半透明の設計図
仏壇のにほひのしをり花すゝき
晩秋や湯船の栓の鎖蹴る
クッキーのドレンチェリーに冬日かな
消防車枯れかけの花ばかり買ふ
マフラーを長々と編む車椅子
罵つて喉の収縮冬の暮
錦絵の暴るる龍や蔵開
引き摺つた跡を汐みづ冬ざるる
耳たぶを揉んでストーブから離る

28

十七歳のローファー

草笛やわれいまここに存在す
ヒメジョオン煌びやかなる音で揺れ
蜂蜜の炭酸注ぐ日の梯子
つつと落つ僕の冷や汗アイスティー
紫陽花が枯れて落ちたらまた来ます
夏柑の家や規制線揺れる
白南風やシャトルがぐんと伸びてゆく
ラ・フランス狂ったギターかき鳴らす
シーグラス澄む秋に浮くうろこ肌
月光や鮭が光を食べている
神立やプレートたちがぶつかって
初恋や蝶々雲の重さ増す
毛布がさらりマーメイドになってみる
綿虫や天使の羽のごときもの
北おろし悲鳴を上げるビルの群れ
鼻歌の消えて哀しき春の空
春雨や亡き曽祖母の息遣い
被災地に向かって息を石鹸玉
擦り切れた靴の踵や春疾風
春の夜「また会いたい」を塞ぐキス
雲落ちて牛となりたる夏野かな
綿菓子は白がいいです夏の空
夏雲や校舎を覆い尽くす海
昼顔や予報外して迎え待つ
アスファルト焼ける入道雲の羽化

29

ぬくもりとともに

兄妹の空席となる炬燵かな
桜舞う行ってらっしゃい祖母の声
春疾風ブレザーの兄の背や遠き
新学期おさがり惜しむ思い出と
春暖や愛おしく寝る川の字よ
春暑し飛び交う猫の数かぞえ
フィルム奥日とひまわりが輝いて
茄子漬けの祖母の味には及ばない
染まる舌かき氷後のにらめっこ
遠巻きに線香花火静かなり
秋めいて逆お下がりを託す我
曇天と煌る眼差し七五三
秋の池祖母の庭には月が咲く
弁当を口に頬張る秋晴に
秋高し舞う葉を掴む肩車
満月や母につられてうた歌う
新蕎麦や香る季節に茹でる母
皆いると橙染まる寒き夜
初詣鐘鳴らす背は頼もしく
兄と我霜柱踏む幼き日
炬燵にて寝ぬる子を掻き抱き父
母の笑みいつでも炬燵のそばにあり
我と犬三角座り年惜しむ
白菜の味噛み締めし上京前
寒き日の炬燵争奪犬勝利

30

季節のメロディ

鶯のさえずり響く気が揺れる
頑張ってあともう少しで卒業だ
第一歩新たな自分見つけよう
別れあり出会いもありの桜道
卒業と新天地への胸騒ぎ
母の日に手紙に咲かすカーネーション
春風でなびく髪が美しい
花粉症春の訪れうれしくない
紫陽花の色が変わると梅雨終わる
歯にしみる頭がキーンとかき氷
ゆさゆさとなびいて揺れる秋の草
色のない真っ青な空心晴れ
歩いててふとした時に金木犀
ぐつぐつと鍋パ始まる冬の夜
渡り鳥朝焼けの中出発だ
冬休みきらきら光る星空よ
冬の風自転車すすめ冬風邪に
黒板に卒業までの日にち書く
いつもより冬の便りが遅く来る
祖母の味体にしみるお正月
緊張でみんなが辛いてよ動け
アラザンがキラキラ光るチョコレート
噛み砕く氷の音が気持ちいい
くちびるを舐めたらヒビが痛いです
見ただけで寒さ感じる白い雪

31

雪、雪、雪。

おい地球今年の雪はどこ行った
雪掻きや一日十分三十円
雪掻きを終えて始まる一週間
前髪に積雪三ミリの孤独
お小言に憎らしき雪晴れを添え
雪像にパンチ一発入れてみる
大雪の日や小テスト三つあり
授業では直弼が死ぬ細雪
教科書は拭けばいいだろ雪合戦
雪染みる足裏に肉刺三つあり
雪深し模試予定表剥がれ落ち
北国の君だけが知る雪のこと
雪玉で遊ぶ僕らはシンメトリー
ふかふかな窓の向こうの雪だるま
昼下がりまた屋根雪の落ちる音
雪催恍ける振りの上手くなり
初雪も初恋も紙上だけの嘘
大雪や眼窩の裏に私いる
雪だるま退化す人は成長す
雪にでも売ってみようかマッチ棒
鍵盤も震える午後の雪しまき
電灯に照る雪今日は積もるらし
遠吠えの響くや今日の雪月夜
雪明かり万年筆のインク青
初雪や夢をみれないおとなたち

雲に雲

卵焼く立冬の窓見やりつつ
小春日の腿にパン屑散つてをり
マフラーや座ればすぐに寝てしまふ
抱きしめるやうに教科書持つて春
遠足の子らが厠へ流れ来る
しやつくりと戦つてゐる遅日かな
蛇穴を出づ水筒の蓋に発条
がたがたと秒針回る暑さかな
流木の飾られてゐる夏館
担任の産休中の百合の花
夕端居素直であれと言はれたる
空蝉は幹に縋つてゐるかたち
スリッパを足で揃へて秋の蝶
魚卵ごと腹を頬張る良夜かな
芒原しづかに風見鶏まはる
買ふ本は作家で決めて秋灯
体育祭肩組む人の名を知らず
教会の壁や延のごとく蔦
雲に雲かさなつてをる秋思かな
日向ぼこ卵の茹で方の話
枯園や犬つかまれて舌を出す
食券の紙のかたさや隙間風
東京の宛名の長し賀状書く
初詣歩みの遅き人が父
独楽上手き子のいつまでも回しをり

33

季節の中で生きていく

挨拶も今日で最後だ桜の木
ランドセル飛び馳せ巡り開幕す
学問に王道はなし桜坂
鳥が鳴く別れの季節目前と
別れるや巣立つ鳥に錘つく
藤の花出会い求めて足進む
太陽を浴びて猫寝る夏休み
瓶の中カランカランと夏の声
時過ぎて自然の記憶くす落ち葉
田んぼ道役目を果たす蛍たち
風鈴の音がりんりん綺麗だな
あぶら汗自分に向き合う価値ありと
栄光に近道はない流れ星
空澄んで見上げた先は秋高し
ヒガンバナ君との時間を忘れない
星月夜笑う門には福来る
落ちにけり会津知らず夕日かな
息白く思い募らす冬隣
雪の音目覚めた私を起こす朝
日が暮れて白い息出て冬目覚め
光る道ドキドキしながら歩き出す
玄関に立ち尽くす猫こたつ待ち
まな板の音が聞こえる布団の中
年初めページをめくる赤い本
雪参る心揺らがす恋心

34

寸歩

信号を待つ一瞬の春疾風
芳しき佐保姫のゐるところから
蒲公英をまたぐ人名をつける人
靴紐のほどける度に土筆かな
疎らなり雑に茂れる春田かな
柩引き通り過ぎたる仏生会
静けさや海底をゆくエイの群れ
小石蹴るこの恋かけてみたり夏
猫にのみ口を聞く子や額の花
空蝉の飴色は夏吸ひてこそ
ペディキュアの青く輝く日焼かな
南下せよひまわりの咲くところまで
コスモスを揺らして行きぬランニング
秋高し鳥ならぬもの飛びさうな
蟷螂の堂々と立つ回り道
陽の照るは四つ割れたる柿の尻
父におんぶせがんでみたき良夜かな
彼は誰時月を踏みつけピンヒール
二つ星ベガまで回ろう神秘主義
小春かな赤きコーンの長き影
呼吸のみ存在しをり竈猫
雪だけど隣を歩く君はいない
待ち合わせの時間忘れるクリスマス
カップ麺買いに行く年の夜の町
弟の屈みて満つる冬の月

35

踊れ高一

どの道を行っても一人初明り
ぬくもりの残る丸椅子二月かな
ポッキーのチョコじゃないとこあげる春
春愁やじわりと滲むリトマス紙
失恋の吐息にまはる風車
永き日やコーヒー満ちる喫茶店
ふはふはと恋実る夢桜草
春風のフォークリフトに運ばるる
しあわせな進路って何霞草
踊り場で踊る高一青嵐
彗星に乗りたし夏の海遠し
ラムネ飲む三次関数迷走す
玄関にセーブポイントくれよ夏
原爆忌歌いたいもの歌いつつ
壁中に押しピンのあと残暑かな
ビーカーの紅茶明るく秋の空
木犀を纏ふるものを買ひにゆく
キャンディで食ひつなぐ帰路秋夕焼
本屋出て手元に流れ星一つ
立冬や爪切りばさみ錆びてをり
一葉忌ページをめくる音軽し
スンドゥブと繰り返しつつ冬に入る
泥中に制服もあり山眠る
水槽に主のおらず春隣
赤シート越しに見る窓春を待つ

36

復活

アボカドのあけはなたれて日永かな
ボックスの受話器おほきし彼岸過
平均台ゆく一団や夏の雲
朝焼や斜面にショベルカー留まる
西進は昼の前借り須磨の海
飛騨高山あさがほに雲みな落ちし
柚子坊に何星人と聞きにけり
「復活」と叫ぶ少年秋の海
芋虫やフィットネスジム硝子張り
若冲の群鶏の尾や稲光
枕木を歩く駅員月今宵
秋彼岸絵の具つつけば色溢る
本棚の奥に本棚蔦紅葉
板塀の五線譜めいて金木犀
菊花展のほかはなんにもない旅程
シナモンスティックでウバ啜るきみとだけ
冬りんご通知は全部OFFにして
霰啼くまた湯に足を踏みいれる
草千里凍雲の影吸われゆき
風呂吹を崩しゆくとき声漏れて
鍵盤のおもさと雪の関係性
電柱に海抜貼られ眠る山
やまあひに湖あり百の鵠あり
関係者以外立ち入り禁止　雪
雪暗や終着駅のさきに町

37

虹

食パンの少しへこみて終戦日
りんだうが悪夢のそばに咲いてゐた
花林糖くだけて残る夜長かな
私にもスラムの子にも星流る
目薬の雫おほきな文化の日
ちるりると落ちていてふの雑貨店
ペテン師にポインセチアの祝福を
靴紐は二回ほどけて星冴ゆる
生唾の飲み込み難き霜夜かな
蜘蛛の巣が張りつめてゐる手の寒さ
相乗りの席沈み込む冬木立
信号は錆びついてをり厚氷
パレットの琥珀微かに春時雨
ありふれた日々にふやけた子猫かな
相槌のリズム崩れてシクラメン
上履きを洗ふ手のひら春うらら
壜に注ぐ光の温度リラの花
泣きさうなスイートピーの曲がり角
豌豆の部屋ごとに星満ちてをり
あの人の仕打ちにクリームソーダ
けんけんの一人もたつく苺かな
ハンカチの丸文字の名や茄子の花
目の合わぬマネキン二人ダリア咲く
百分の十八生きて冷奴
虹のいろ数へてひとつ足りなくて

38

生生流転

春暁の人目感じず朝散歩
道端に二つの影と土佐水木
花曇水面に白き道の花
暗闇に小さな希望おぼろづき
一年後少し痩せたね桜の木
星月夜眩しき光に頬緩む
春の昼思い浮かんだ子どもたち
振り返り思い出に浸る煤払
オオデマリ結婚式で飾ろうよ
背が同じ目を見て気づく父の日に
雷に怯える子供ノスタルジー
梅雨明けや土のコートに響く声
風薫る風鈴響く独り住い
ひさしぶりいつのやつかなアロハシャツ
涼し気な君を羨む夏の星
ラムネ飲む女の子ただ泣いていた
たくさんのススキの中で何遊ぶ
あの時の感謝を贈る赤い羽根
舟を出し秋澄む海に手が止まる
枯葉散り重なる音色は豊かかな
霜夜の空輝きし過去偲ぶ
車もね着てるよ白のジャケットを
この季節君には似合う雪化粧
半年後老けた横顔寒の入り
年の内変わらないのは時計だけ

39

帰る日もあり

野を焼くや裏戸に寄せてオートバイ
冷めぬまま詰め卒業の卵焼き
鳥雲に入るオーライがはやまらない
虎杖を倒して碑文読みにゆく
彼岸会や泡の浮き立つプラカップ
花人をつければガラス工房へ
ほんたうの晴天羊刈つてより
岩魚焼く炎が塩を散らしをり
たちまちに噴水の翅声の中
立葵いづれ手紙も出さなくなる
夏草や走つて人はとりけもの
峰雲や呼吸を示す化学式
空蟬をやさしくつまむ白衣かな
腕軽く叩いて胡椒さやけしや
虫の声ＩＣＵの自動ドア
栞紐ふたすぢ垂るる夜食かな
帰る日もあり掌に鶉乗するため
ペンは濃き紺を湛へて末枯るる
らふそくの向うより鶴来たりけり
落栗を嵌めたしアンタレスの赤
浮寝鳥電波時計の狂ひたる
胸板でかまくらの雪固めけり
手に髪の抗ひてをりスキー宿
傘畳むやうに暮れけり落葉焚
広告にあけぼのの空枯芭蕉

40

ＴＯＫＹＯ(陶郷)・冬

踏んで行く時雨れる気配の潦
裏路地を巡って出会う冬薔薇
冬日向タイルの中のヒラメ踏む
唐揚げを取り合うじゃんけん皹の手で
おでん盛る波紋絵皿の深い碧
和毛めく樹形図型の冬芽かな
窓明かり映る陶器の冬林檎
凍蝶を描きし耳付花瓶なり
染付の呉須の濃淡遠雪嶺
冬湖の深さほど発色青磁壺
冬日差す磁器の花瓶に映る顔
大皿に吸い殻溜まる冬陶房
雪雲の流れ白磁に映るまで
手のひらに古砥部の破片冬麗
陶器磁器分かたずつつむ冬日差
釉融ける煉瓦を滑る寒の雨
ナルシスのような真冬の白磁皿
大寒や窯場の隅に忍ぶ猫
ものはらへ寒の雨来る無音界
砥部絵皿赤絵と染めし冬夕焼
白磁観音静かに仕舞う冬の暮
紅梅を匂わせている砥部絵壺
春立つや初恋噛砕できぬまま
窯に干す石膏型や冴返る
ふきのとう隠しの埴輪がらんどう